

# Skeireinsのゴート語文の 定形の位置について

論文

甲斐崎 由典

早稲田大学大学院文学研究科  
独文専攻Angelus Novus会（編）  
『Angelus Novus』 第22号  
1～17頁

1994年12月24日発行

# Skeireins のゴート語文の定形の位置について

甲斐崎 由典

## 0. 概要

ゴート語で書かれたヨハネによる福音書の注解書（通称 die Skeireins）8 葉の内、第 1 葉を用いてゴート語の定形の位置を調査した結果、従来から言われている VE（定形後置）の他に、V2（定形第 2 位）の傾向が見られることが示唆された。

## 1. なぜ注解書を分析するか

ゴート語は、断片的なルーン碑文を除けば、ゲルマン語の最も古い形を現代に伝えているので、大変研究価値の高い言語だと言える。しかし、現存するゴート語の文献の内、言語学的に分析対象として使用に耐えると言えるものはふたつしかない。ひとつはゴート語訳聖書で、もうひとつは新訳聖書のヨハネによる福音書の注解書であるが、この貴重なふたつの文献にもそれぞれ問題がある。まずゴート語訳聖書は、底本として使ったギリシア語訳聖書から忠実に逐語訳した<sup>1</sup>ものであることがわかっており、従って、このゴート語訳聖書がゴート語の標準的な語順を示していると考えすることは難しい。またヨハネによる福音書の注解書の方は、後世ページ毎にばらばらにしてラテン語を上書きするために使うなど、ひとまとまりの文書としての扱いを受けなかった<sup>2</sup>ために、ゴート語訳聖書と比べて、全体として大変短く、判読困難な箇所が多い文献となってしまった。しかも、ゴート語訳聖書と異なり、何か別の文書の訳書かどうかともわからず、つまり底本が今のところ知られていないため、判読できても文章として理解できない、文法的に解析できない部分も多い。

こうした事実から、ヨハネによる福音書の注解書はゴート語の文献としてあまり重要でないように考えられがちであるが、仮にこの注解書が、底本が知られていないことから予想されるように、何か別の文書の訳書ではないとすると、ゴート語の語順について分析する場合には、この注解書は大きな手がかりということになる。もちろん、ゴート語訳聖書も当時のゴート語の話し手のために書かれたわけであろうから、ゴート語の語順を表していないとは言えないだろうが、底本のギリシア語とほぼ同じ語順で全編書かれているというのはいささか不自然ではないだろうか。ゴート語訳聖書の語順が底本と同じになってしまった理由としては、訳者がゴート語のネイティブ・スピーカーではなかったか、あるいは明治維新以降の日本語の書き言葉などのように、ゴート語の話し手にとっては全く新しい事柄を訳すために、かなり底本のギリシア語<sup>3</sup>に引きずられたゴート語を書かざるを得なかった<sup>4</sup>か、またはゴート語本来の語順はギリシア語の語順と等しかったか、などが考えられるが、私は一番最後の本来語順一致説は採りにくいと思う。

そこで本研究では、このヨハネによる福音書の注解書が訳書ではなく、従って注解書はゴート語訳聖書よりもより自然な、つまりゴート語らしい語順を示していると仮定して、ゴート語の定形の位置にどのような傾向があるか、現存する8葉の断片の内、まず手始めとして第1葉について調査した。

## 2. 注解書のゴート語の語順について

元々現存する文献が少ない上に、単純にページ数で見てもあまりに短いため、ゴート語のヨハネによる福音書の注解書の一葉一葉は、ゴート語訳聖書と比べて相対的に非常に頻繁に、また詳しく取り上げられることになった<sup>5</sup>。こうして、1817年にそれまで保管されていた羊皮紙にゴート語で何か書かれていることが判明して以来、この注解書については非常に広い範囲で数多くの研究<sup>6</sup>が成されてきたわけだが、数多くの未解決な点でもよく問題とされるのは、やはり前節でも述べたように、注解書がある別の文書の訳書であるかどうか、ということである。

注解書が訳書かどうかについては様々な研究者が意見を述べてきたが、そ

それぞれの研究者が各々の結論に達した経緯を一瞥してみると、おもしろい傾向があることがわかる。まず、大方の研究者は、判断材料が少ないことから明確な判断は避けながらも、注解書の言語は少なくとも自然なゴート語ではなく、訳書ではないにしても相当ギリシア語かラテン語の影響を受けていると結論している<sup>7</sup>。一方、Lenk (1910) や Ebel (1978) らは、多少はギリシア語・ラテン語の影響を認めるとしても、注解書の言語はギリシア語・ラテン語とははっきり区別するべきものだろうと述べている<sup>8</sup>。そこで、この注解書書き下ろし説を採る少数派の研究がどのような分析結果に基づくものなのか見てみると、どちらも具体的に注解書のゴート語文の語順を調べたもの<sup>9</sup>なのである。逆に、完全な注解書訳書説とまで行かなくても、注解書のゴート語が不自然だとする研究者は、例示したとしても断片的に、いくつかのギリシア語・ラテン語的な語法の例を根拠としているだけだとわかった。

しかしながら、このような問題について結論を出す時に、語順を調べた方が正しい結果が得られるとは限らないし、印欧語族の言語では一般に古いもののほど語順が自由であることを考えると、無標の語順の文が書き並べてあるはずのない文書の言語について、語順だけを根拠に何かを主張することは難しいはずである。とはいえ印欧語族の言語の中で、現代ゲルマン諸語には特に定形の位置が明確に決められているという特徴があることから、注解書のゴート語が自然な、つまりゲルマン語的なものかそうでないかを判断するための尺度として、定形の位置を手がかりにして調べることは無駄ではないと考えられる。ここでいう定形の位置とは、いわゆる V1 (定形第 1 位) V2 (定形第 2 位) VE (定形後置) のどれに当てはまるか、つまり文頭からの絶対位置が何番目かということであり、定形の前や後にどんな品詞があるか、ということは直接には問題としない<sup>10</sup>。

Lenk (1910) の研究は、注解書の語法をほぼ全ての語について分析・分類しながら、語順についても触れているが、定形(述部)の位置については、なぜか全ての文を分類しておらず、また主節と従属節の区別に基づいて集計した数字は、主節と従属節を何を根拠に分けたかが明確でないために意味が薄れてしまっている<sup>11</sup>。それ以外にも、これは何も定形の位置についての記述箇所に限ったことではないが、注解書の該当部分を示すときに行番号ではなく、Ia, Ib というように(25行ずつの)段番号しか書いていないので、後から

確認できない記述がかなりある。そして、結論として注解書のゴート語文にはVEの傾向があると述べている<sup>12</sup>わけだが、そのためか結局定形の位置の調査といっても、VEかそうでないかに重点が置かれており、V1、V2、VEを区別して新たに調査し直すことが必要であった。

Ebel (1978) の論文は、注解書の語順について分析したものとしては最も新しく、調査結果の分析にはテーマ・レーマ分節の手法を導入したりしており、現代的なゴート語の研究と言える。Ebel は注解書のゴート語文の語順をGreenberg らによる言語類型論に沿って分析するために、主語と動詞、目的語と動詞、属格付加語と修飾される名詞、付加語的用法の形容詞と修飾される名詞、関係文と先行詞、比較級がある時の比較するものとされるもの、副詞と動詞、本動詞と（話法の）助動詞、という組み合わせを設定し、それぞれの組の内でどちらが相対的に前に来るか後に来るかを調べている。結論としてはLenk (1910) と同じように、注解書のゴート語はOV（定形が目的語よりも後に来る）言語である、と結んでいる<sup>13</sup>が、ただでさえ短く、意味のはっきりしない箇所がある注解書について調べるのに、しばしば分析する文に強引にテーマ部・レーマ部を仮定しており、その結果例えば主語と動詞の位置関係を調べる場合など、取り上げる例を文中に変則的な強調部分がないものに限ることになり、Lenk (1910) の場合と同じように、いくつかの文を除いた上での結論となってしまうている。それはともかく、Ebel が調査した定形（動詞）の位置とは、何か別の文中の要素との相対位置であり、定形の文中での絶対位置を知るためには直接参考にはできないので、やはり新たに調べ直すことが必要となった。

また一方、注解書のゴート語が不自然であるという主張の根拠として、よく問題とされるのは、ゴート語訳聖書と似て、現在分詞を用いた非常に長い冠飾句が多いという傾向<sup>14</sup>である。このような冠飾句がギリシア語・ラテン語によく見られるものであるため、注解書訳書説が比較的多数の研究者に支持されることになったようだが、現時点では私はギリシア語・ラテン語をほとんど知らないため自分の見解を述べることができない。そうすると、そのような中途半端な知識の者が注解書書き下ろし説・訳書説論争に口を挟むことは控えるべきなのかも知れないが、注解書のゴート語文の冠飾句については次のように考える事もできると思う。すなわち、ふたつのゴート語の文献

がほぼ5世紀頃のものだとすると、ゲルマン語で書かれた文献は、その後約300年近く見つかっていないわけである。しかも、その約300年以上経ってからの文献はどれも同じゲルマン語であるとはいえ、ゴート語とは異なる東ゲルマン語以外の言語で書かれているものである。そうすると、そのような、いわば後世の言語からは全く窺い知ることのできないような言語現象がゴート語にだけ存在しても不思議ではないと思う。例えば、ゴート語には単一形の受動態があったことがわかっているが、このこともゴート語訳聖書とその底本が発見されなければ、私たちがいかに比較言語学の粋を結集させようとも知り得なかった言語現象のひとつであると言えよう。従って、私は現段階では、ギリシア語・ラテン語的な冠飾句が多いという事実は、注解書のゴート語が不自然であると言う主張の論拠としてはそれ程強力なものではないと考えている。

### 3. 定形の位置の調査

今回は、ゴート語のヨハネによる福音書の注解書の一部と確認されている8葉の羊皮紙の内、通常第1葉とされるものに書かれている文について定形の絶対位置を調査した。

私自身は直接羊皮紙を見ながら調査することはできないので、注解書のゴート語原文と現代語訳（英語とフランス語）は Bennett (1960), S. 51-54 と Mossé (1956) S. 256-259 を原則として無条件で採用した。そして品詞や語法について不明瞭な点がある場合は、適宜その他の研究を参考にした。

まず初めに、調査対象とした14のゴート語文を、見やすいように略記、合体字は書き下し、引用符、句読点は現代ドイツ語風に改めたり追加したりして掲げる。また、定形には下線を引いた。Hはhvを表す。

1. „Nist, saei frapjai aipþau sokjai gup.
2. Allai uswandidedun.
3. Samana unbrukjai waurþun.“
4. Jah ju uf dauþaus atdrusun stauai.

5. Inuh þis gam gamains allaize nasjands, allaize frawaurhtins afhrainjan, ni ibna nih galeiks unsarai garaihtein, ak silba garaihte wisands, ei<sup>15</sup>, gasaljands sik faur uns hunsl jas<sup>16</sup> sauþ guþa, þizos manasedais gawaurhtedi uslunein.
6. Þata<sup>17</sup> nu gasaiHands iohannes, þo, sei ustauhana habaida wairþan fram frauþin, garehsn, miþ sunjai gab.
7. „Sai, sa ist wiþrus guþs, saei afnimib frawaurht þizos manasedais.“
8. Mahtedi sweþauh, jah inu mans leik, waldufnja þataine gudiskamma, galausjan allans us diabulaus anamahtai.
9. Akei was kunnands, þatei swaleikamma waldufnja mahtais seinazos nauþs ustaiknida wesi jan<sup>18</sup> ni þanaseiþs fastaida<sup>19</sup> garaihteins garehsns, ak nauþai gawaurhtedi manne ganist.
10. Jabai auk diabulau fram anastodeinai nih nauþjandin, ak uslutondin mannan jah þairh liugn gaHatjandin<sup>20</sup> ufargaggan anabusn, þatuh wesi wiþra þata gadob<sup>21</sup>, ei frauja, qimands mahtai gudiskai jah waldufnja, þana galausidedi jah nauþai<sup>22</sup> du gagudein gawandidedi.
11. Nei auk puhtedi þau in garaihteins gaaggwein ufargaggan þo faura ju us anastodeinai garaidon garehsn?
12. Gadob<sup>23</sup> nu was mais þans swesamma wiljin ufhausjandans diabulau, du ufargaggan anabusn guþs, þanzuh aftra swesamma wiljin gaqissans wairþan nasjandis laiseinai jah frakunnan unselein þis faurþis uslutondins ins<sup>24</sup>, iþ sunjos kunþi du aftraanastodeinai þize in guþa usmete gasatjan.
13. Inuh þis nu jah leik mans andnam, ei laisareis uns wairþai þizos du guþa garaihteins.
14. Swa auk skulda, du galeikon seinai frodein, jah mans aftra galapōn waurdam jah waurstwam, jah spilla wairþan aiwaggeljons usmete.<sup>25</sup>

次に、決定した定形の絶対位置を、関係する部分の抜粋と共に挙げる。[...]で取り除いた部分は上に挙げた全文と比べればわかるように、主語や目的語と同格である現在分詞句 (5-2, 10-2, 10-3; 6-2) や定形と結び付いている不定形句 (不定詞句) の細かい部分 (8, 11, 12, 14) や同じ接続詞に連なる他の従属節 (9-3) である。今回の調査では、この以前から話題になることの多い同格の現

在分詞句<sup>26</sup>は、定形の絶対位置を数えるときには無視してよい挿入句として扱うことにした。

また前節で、Lenk (1910) は不明瞭ながらも主節と従属節の区別をしていることを述べた。現代ドイツ語や現代オランダ語を考えると、主節と従属節を区別して定形の位置について考えることは重要だとは思えるが、ゴート語については等位接続詞はともかく、従属接続詞と（文接続的）副詞の区別が明らかになっていないので、今回の調査では主節と従属節の区別は見送ることにした。

|      |                  |    |                                                                              |
|------|------------------|----|------------------------------------------------------------------------------|
| 1-1  | V2               | VE | nist (ni ist)                                                                |
| 1-2  | V2               |    | saei <u>fraþjai</u> guþ                                                      |
| 1-3  | V2               |    | saei <u>sokjai</u> guþ                                                       |
| 2    | V2               | VE | allai <u>uswandededun</u>                                                    |
| 3    |                  | VE | samana unbrukjai <u>waurþun</u>                                              |
| 4    | V2               |    | jah uf dauþaus <u>atdrusun</u> stauai                                        |
| 5-1  | V2               |    | inuh þis <u>gam</u> gamains allaize nasjands                                 |
| 5-2  | V2 <sup>27</sup> |    | ei [...] þizos manasedais <u>gawaurhtedi</u> uslunein                        |
| 6-1  |                  |    | sei ustauhana <u>habaida</u> wairþan                                         |
| 6-2  |                  | VE | þata nu gasaiHands iohannes [...] miþ sunjai <u>qab</u>                      |
| 7-1  | V2               |    | sa <u>ist</u> wiþrus                                                         |
| 7-2  | V2               |    | saei <u>afnimib</u> frawaurht                                                |
| 8    | V1               |    | <u>mahtedi</u> sweþauh [...] galausjan allans                                |
| 9-1  | V2               |    | akei <u>was</u> kunnands, þatei                                              |
| 9-2  |                  | VE | þatei swaleikamma waldufnja mahtais seinazos nauþs ustaiknida<br><u>wesi</u> |
| 9-3  |                  |    | þatei [...] ak nauþai <u>gawaurhtedi</u> manne ganist                        |
| 10-1 | V2               |    | þatuh <u>wesi</u> wiþra þata gadob                                           |
| 10-2 |                  | VE | ei frauja [...] þana <u>galausidedi</u>                                      |
| 10-3 |                  | VE | ei frauja [...] nauþai du gagudein <u>gawandidedi</u>                        |
| 11   |                  |    | nei auk <u>þuhtedi</u> [...] ufargaggan                                      |
| 12   |                  |    | gadob nu <u>was</u> [...] wairþan [...] frakunnan [...] gasatjan             |



- 13-1            VE    inuh þis nu jah leuk mans andnam  
 13-2            VE    ei laisareis uns wairþai þizos du guþa garaihteins  
 14                swa auk skulda [...] galapon [...] wairþan

最後に以上の調査結果を次の表 1 にまとめた。

表 1：ゴート語のヨハネによる福音書の注解書第 1 葉の定形の位置

| 定形の位置    | 全ての文 |         | 引用文を除く |       |
|----------|------|---------|--------|-------|
| V 1      | 1    | 4 %     | 1      | 6 %   |
| V 2      | 1 1  | 4 6 %   | 5      | 2 9 % |
| VE       | 9    | 3 8 %   | 6      | 3 5 % |
| V 2 / VE | — 2  | — 8 %   | 0      | 0 %   |
| その他      | 5    | 2 1 %   | 5      | 2 9 % |
| 合計       | 2 4  | 1 0 1 % | 1 7    | 9 9 % |

百分率の合計が100%になっていないが、これは標本数が少ないためである。また、表中V2/VEの項の数字は、文中に2語しかなく、V2、VEのどちらにも決められない定形 (1-1, 2) を数えたものである。

表の右側は、注解書中の聖書からの引用箇所のある文の定形を除いて数えた場合の結果であるが、これらの引用箇所の出典も明らかとは言えないので、私自身はこの右側の数字を左側の数字より重んじるつもりはない。

さて、上の表 1 の数字を元に、注解書第 1 葉のゴート語文についてV2とVEの出現比率を重複例を除いて求めると、全ての文について計算した場合は9:7、聖書からの引用部分を除いて計算した場合は5:6ということになる。このことから、現段階ではまだ標本数が少ないため、注解書のゴート語文ではV2がVEよりも多い傾向がある、ということとはできないが、V2に注目する必

要がある、と考えることはできそうである。

#### 4. 調査結果の考察

とにかく標本数が少ないので、ここでは今後の指針を探るため、という但し書きを付けた上での暫定的な結論を書くことにしよう。

今回、ゴート語のヨハネによる福音書の注解書の文について、定形の絶対位置を調査してわかったことは、英語を除く主な現代ゲルマン諸語の主節に共通して見られる、いわゆるV2傾向がゴート語にもあった、あるいはゴート語の時代に既に始まっていた可能性がある、ということである。

この考え方は、まったく逆のことを述べているわけではないとはいえ、2節で挙げた Lenk (1910) や Ebel (1978) の、ゴート語はOV言語である、という主張と相容れないものの様に見えるが、どちらの考え方も注解書のゴート語が、ギリシア語・ラテン語とは語順の点からもはっきり区別されるべき言語であることを主張しようとしているという共通点がある。

その一方で、今回私が行った調査に関して言えば、定形の位置を数える際にいくつかの句や節を挿入句として無視したが、このような数え方は、上のようないわば親ゲルマン語的な結論を導くための意図的な、誘導的な方法だという批判もあると思う。しかし、どれが挿入的な句や節かを見極めながら文の構造を明らかにするという方法は、現代語でも複雑な入れ子文(Schachtelsatz)を分析する時などに大変有効なわけで、私自身は今回のようなV1、V2、VE傾向の調査ということであれば問題はないと考えている。

とはいえ今回のこのゴート語の定形の絶対位置の調査には、以下に述べるような本質的な不足点がある。

まず何度も言うようだが、調査した文が少なすぎることである。今回はわずか24個の文について調べただけで百分率まで出したが、この結果を元にどんな主張をするにしろ、これでは科学的な根拠として全く貧弱と言わざるを得ないだろう。

また、この注釈書が書かれた頃のギリシア語・ラテン語、そしてギリシア語と同じ様な結果が出るではあろうがゴート語訳聖書のゴート語についても、

同じ様な調査を多少なりとも行って、今回の調査結果と比較対照するべきであろう。その結果例えば、今後注釈書8葉の調査が終了して、注釈書のゴート語についてV2傾向が明らかになり、さらに同じ頃のギリシア語・ラテン語、そしてゴート語訳聖書のゴート語にも同じ傾向が観察されれば、今度は逆に注釈書訳書説にも根拠を与えることになる。

さらに、今後の発展の可能性としては、その他の（古期・中期）ゲルマン諸語についても同じ調査を行って比較対照すると、ゲルマン諸語の定形の位置について、何らかの通時的な傾向が見いだせるかもしれない。

## 注

1. 厳密に言えば、ギリシア語とゴート語は同じ印欧語族の言語ながら、お互いにかなり異なった部分もあるわけで、品詞のレベルまで比べた上での完全な逐語訳というわけではない。逐語訳的な一対一対応の関係は特に語順について言える。Vgl. Streitberg (1920), S. 33-34; Streitberg (1971), S. XXXI-XLVI.

2. Vgl. Bennett (1960), S. 8-11.

3. 本論文では、単に「ギリシア語」と書いた場合、いわゆる古典ギリシア語を指すものとする。

4. Lenk (1910), S. 237-238: „Die bibel stellt gegenüber einem anderen übersetzungswerke an die kunst und ausdauer des übersetzers doppelte und dreifache anforderungen. Zunächst objectiv, indem manche fremde, specifisch orientalische construction an die sprache des übersetzers angepasst werden muss, [...]. Was wunder daher, wenn sich einem derartigen übersetzer (Wulfila) alle tiefen seiner sprachmöglichkeiten eröffnen und er seiner muttersprache als bewusster künstler gegenübertritt?“

5. Helm (1958), S. 201: „Die Skeireins ist im germanischen Schrifttum einer der am häufigsten behandelten, aber auch einer der am stärksten mißhandelten Texte.“

Marchand (1964), S. 268: „The eight leaves of Codex Ambrosianus E, dubbed by one of their first editors Skeireins, i.e., “commentary, elucidation,” have received more attention on the part of Gothic specialists than any other eight leaves in the Gothic corpus.“

6. Vgl. z.B. Streitberg (1920), S. 34-36; Bennett (1960), S. 12-25; Braune (1981), S. 7.

7. Vgl. z.B. Bennett (1960), S. 38-42, 44; Ebbinghaus (1963), S. 131; Helm (1958), S. 204-207; Streitberg (1920), S. 35-36.

8. Ebel (1978), S. 82: „Aus diesen Einzelergebnissen geht klar hervor, daß der Skeireintext sich seiner Struktur nach so grundlegend von Wulfilas Bibelübersetzung (die ja die VO-Struktur des Griechischen zeigt) unterscheidet, daß es sich auf keinen Fall um eine wörtliche Übersetzung aus dem Griechischen oder Lateinischen handeln kann.“

Lenk (1910), S. 242: „Ihr (Der Skeireins) am griechischen gebildeter stil hat durch anspannung aller sprachlichen möglichkeiten eine ausgeprägte individualität mit durchaus germanischer grundlage.“

Lenk (1910) はさらに、305ページで „So möchte ich auch die sprache der skeireins eine umgangssprache, die geschrieben, und eine schriftsprache, die gesprochen wird, nennen;“ と述べているが、さすがにこの記述に対しては Streitberg (1920), S. 35-36 が反論している。

9. このふたつの研究の他に、注解書の語順について調べた研究は Ebel (1978), S. 49-50 に挙げてあるが、今回私はこれらの研究を参照することができなかった。なお、Bennett (1960) は、19ページで „McKnight, G. H.: The Language of the Skeireins. MLN 21, col. 205-209“ を挙げているが、この論文の掲載号は MLN 12 の誤りである。

10. 厳密に言えば、V というのは Verb を略したものであるが、一般に、V1、V2、VE と書くときの V は動詞というよりは定形を指していることの方が多いので、本論文もその習慣に従うことにする。

11. Lenk (1910), S. 278.

12. Lenk (1910), S. 280: „Als eines der hauptcharacteristica der skeireinistischen wortstellung ist das streben des verbums gegen den satzschluss zu bezeichnen;“

13. Ebel (1978), S. 82: “Das Gotische der Skeireins weist deutlich wesentliche Strukturmerkmale einer OV-Sprache auf.“

14. Vgl. z.B. Bennett (1960), S. 36-38; Helm (1958), S. 206; Lenk (1910), S. 240.

15. この部分は、Bennett (1960), S. 51 が „a common Saviour of all - [...] being righteousness Himself - came to cleanse away the sins of all, [...] that He might accomplish the redempcion of the world“ と訳しているのに対し、Mossé (1956), S. 257 は „le sauveur commun de tous est venu pour purifier (=effacer) les péchés de tous, étant [...] la Justice elle-même qui [...] de ce monde a accompli la rédemption“ と、ei を関係代名詞として訳している（gawaurhtedi の訳が a accompli というのはいささか不正確であろう）が、私は文脈も考え合わせて Bennett の接続詞説を採りたい。省略された主語は前の方の gamains allaize nasjands だとした方が、意味内容としても具体的になり、福音書を注解するという目的に沿うことになると思う。また Lenk (1910), S. 251 も、ここの ei を「主節中に対応する相関語 (inuh þis) がある従属接続詞」

16. これは jah のhが後の子音に同化したものである。Vgl. Braune (1981), S. 54; Streitberg (1920), S. 53.

17. この þata はすぐ後の þo garehsn を指すと考えられるが、Lenk (1910), S. 266 によれば、このような（代名詞の）文法性の不一致は古期ゲルマン諸

語に一般的な現象だそうだ。Vgl. auch 高橋 (1994), S. 194.

この部分の訳は、„Now John perceiving this, the plan [...], said truly“ (Bennett (1960), S. 51-52), „Or Jean voyant cela, le plan [...], a dit avec vé-rité“ (Mossé (1956), S. 257) となっている。

18. 注16を参照。

19. ここでは、jan (jah) の前の節に出てきた wesi が省略されているため、ちょっと見たところでは fastaida は fastan の直接法過去形単数1, 3人称のようであるが、受動形の希求法過去形の一部としての過去分詞（ここでは女性形単数主格）であると考えの方が、文脈からいっても自然だ。この部分は、Bennett (1960), S. 52 では „and thenceforth the plan of righteousness would not be observed“, Mossé (1956), S. 257 では „et que le plan de la justice ne serait plus maintenu“ と訳されている。Vgl. auch Lenk (1910), S. 255; Streitberg (1971), S. 457.

20. この語は注解書だけに現れ、gaHatjan „entice“ (Bennett (1960)), „exciter“ (Mossé (1956)) の変化形（形容詞として使われた現在分詞の男性単数与格形）とされている。ここは、羊皮紙を見た限りではゴート語訳聖書にも出てくる gaHotjan の変化形とも読み取れ、しかも、どちらに読み取っても文脈とは大体合ってしまう部分であるが、Bennett (1950), S. 1269-1270, Bennett (1960), S. 87（前者の方が詳しい）は、羊皮紙の該当部分の念入りの観察と、文脈の厳密な吟味から、最初の写字生が書いたoを次の写字生がaに訂正した、と結論している。

Lenk (1910) は gaHotjan 説を採っており、261ページで „durch lüge bedrohen, verleiten“ という訳語を挙げているが、255ページではさらに、gaHotjan を知覚動詞・伝達動詞として不定形（ufargaggan を指すと思われる）と共に使われたもの、と定義している。Vgl. auch Streiberg (1971), S. 457.

21. これは形容詞 gadofs の中性単数主格形である。このbとfの交替については Braune (1981), S. 50-51 を参照。なお、Braune (1981) は語彙の章の

182ページで、gadob ist „es ziemt“ を動詞 gadaban の項に挙げているが、語源は別として gadob は gadaban の過去分詞でもないわけで、不適切な記述と言わざるを得ない。

22. 動詞 gawandidedi (gawandjan の希求法過去形単数 3 人称) の目的語 pana が省略されており、naupai は Lenk (1910), S. 291 によれば「様態の副詞として使われた与格」ということになる。この部分の訳は、„if the Lord [...] had converted him (man) to godliness by force“ (Bennett (1960), S. 53), „que le Seigneur [...] par la contrainte le (homme) convertît à la piété“ (Mossé (1956), S. 257) となっている。

23. 注21を参照。

24. Mossé (1956), S. 258 では is となっている。この ins という代名詞は、Bennett (1960), S. 88 が詳しく述べているように、Bennett (1960) 以前の校訂本では完全に無視され、存在しないものとされてきたものである。Bennett は、Bennett (1950, 1957) でも注解書の第 1 葉の解説にあたっての問題点に触れているが、この代名詞については Bennett (1960) で初めて明らかにした。そうすると、Bennett (1950) に従って原文を挙げたという Mossé (1956) は、どこからこの代名詞を拾い出したのだろうか。しかし „unselein þis faurþis uslutondins is“ の部分のフランス語訳は „la méchanceté de leur précédent maître d'erreur“ (Mossé (1956), S. 259) となっている。

25. この後に、

Ip in þizei nu witodis gaaggwein ni þatain gawandeins...

という文章が続くのだが、途中で切れているため、今回の調査対象としては不適当なものとして除いた。

26. 本論文 2 節を参照。

27. この部分での ei は接続詞と見なすことにした（注15を参照）ので、定形 gawaurhtedi （gawaurkjan の希求法過去形単数3人称）は þizos manasedais （so manaseþs の単数属格）の次で2番目ということになる。

## 文献

- Bennett, William Holmes (1950): The Milanese leaves of the Skeireins under ultraviolet radiation. In: Publications of the Modern Language Association of America (PMLA) 65/6. Bryn Mawr. 1263-1281.
- (1954): The Vatican leaves of the Skeireins in high-contrast reproduction. In: PMLA 69/3. 655-676.
- (1957): The “missing” leaf of the Skeireins under ultraviolet radiation. In: PMLA 72/4. 555-562.
- (1960): The Gothic Commentary on the Gospel of John: skeireins aiwaggeljons þairh iohannen. A Decipherment, Edition, and Translation. (Modern Language Association of America. Monograph series 21). New York.
- Braune, Wilhelm (1981<sup>19</sup>): Gotische Grammatik. Mit Lesestücken und Wörterverzeichnis. Neubearb. von Ebbinghaus, E. A. (Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte A Hauptreihe 1). Tübingen.
- Ebbinghaus, Ernst A. (1960): Einige Bemerkungen zur Skeireins. In: Modern Language Notes 75/4. Baltimore. 339-342.
- (1963): Buchbesprechung von Bennett (1960). In: Language 39/1. Baltimore. 128-134.
- Ebel, Else (1978): Zur Folge SOV in der Skeireins. In: Sprachwissenschaft 3/1. Heidelberg. 49-82.



- Feist, Sigmund (1939<sup>3</sup>): Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache. Mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen. Leiden.
- Helm, Karl (1958): Einiges über die Skeireins. In: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (PBB) 80/2. Tübingen. 201-207.
- Hempel, Heinrich (1962<sup>3</sup>): Gotisches Elementarbuch. (Sammlung Göschen 79/79a). Berlin.
- Jellinek, Max Hermann (1891): Zur Skeireins. In: PBB 15. Halle. 438-440.
- Kluge, Friedrich (1989<sup>22</sup>): Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Neubearb. von Seebold, E. Berlin / New York.
- Köbler, Gerhard (1989): Gotisches Wörterbuch. Leiden / New York / København / Köln.
- Lehmann, Winfred P. (1986): A Gothic etymological dictionary. Based on the third edition of Vergleichendes Wörterbuch der Gotischen Sprache by Sigmund Feist. Leiden.
- Lenk, Rudolf (1910): Die syntax der skeireins. In: PBB 36. Halle. 237-306.
- Marchand, James W. (1964): Buchbesprechung von Bennett (1960). In: Journal of English and Germanic Philology 63/2. Urbana. 268-273.
- Mossé, Fernand (1956<sup>2</sup>): Manuel de la langue gotique. Grammaire, textes, notes, glossaire. Paris.
- Nielsen, Niels Åge (1989<sup>4</sup>): Dansk Etymologisk Ordbog. Ordenes Historie. København.
- Streitberg, Wilhelm (1920<sup>5/6</sup>): Gotisches Elementarbuch. Heidelberg.  
—— (1971<sup>6</sup>): Die gotische Bibel. Heidelberg.
- Tollenaere, Felicien de / Jones, Randall L. (1976): Word-indices and wordlists to the Gothic bible and minor fragments. Leiden.
- Zitzelsberger, Otto J. (1961): Buchbesprechung von Bennett (1960). In: The Germanic Review 37/2. New York. 147-149.

- 川島淳夫 (Hrsg.) (1994): ドイツ言語学辞典. 東京.  
高橋輝和 (1982): ゴート語入門. 東京.  
高橋輝和 (1994): 古期ドイツ語文法. 東京.  
フランシスコ会聖書研究所 (Hrsg.) (1979): 新訳聖書. 東京.